

旧暦明治四年十月二日、江戸下町は浄土宗の古刹、下目黒蟠龍寺にふたりの「異人」が、前触れもなく、栄鋒町道具屋稼業金松なる人物と通訳一名をともなって現れる。用向きはといえば、境内に野ざらしになっている丈六（というのだから高さは4メートルを優に越える）の仏像を譲り受けたいとの買収の儀であった。寺に残された当時の日鑑を見ると、「驚入」うんぬんの文句が何度も出てくる。責任の所在も詳らかでない日本側当局筋の周章狼狽ぶりも窺えようというものだ。廃仏毀釈のご時勢のなか、これが最大寸法の流出品となる。

この流出金銅仏がパリ、モンソー公園脇のパリ市立セルヌーシ美術館二階に鎮座している大仏さまだと知れたのは、流出後百年を験する1983年のこと。その「発見」はいまは亡きコレージュ・ド・フランス日本学講座教授ベルナル・フランク先生が、「メグロの仏」を頼りに電話帳片手で目黒じゅうのお寺に電話をかけてなしとげた「快拳」だった。住職の吉田嘉雄さんは、行方知れずだったご本尊様の供養に、さっそくパリへと旅立たれ、筆者も通訳を仰せつかった。

この流出譚には、神話的といつてよい伝説の尾鱗がつく。仏様がパリに亡命してから半世紀を越えた1925年、フレデリック・ルフェーブルはこんな記事を公表する。曰く大仏消失の責任を取らされて三人の坊主の首が飛んだ。曰く横浜で船に乗せたはよいが、真ん中に置かないと船が傾ぐので、ボイラーを移動させねばならなかった。曰く、マルセイユによろやくご来航／来迎という段でまたまた問題発生。貨物列車に乗せたところが、トンネルで頭



連載④
消えた大仏の消された物語り
目黒井天蟠龍寺金銅阿弥陀仏流出始末

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教授

稲賀繁美
Inaga Shigeni

が問 [つか] える。仕方なくご本尊は馬車でそろりそろりとパリまで運ばれる事になった……。

この流出劇の当事者のひとり、テオドル・デュレは、旅先のポンティシェリからパリに居る友人の画家エドゥアール・マネに手紙を認めて曰く「諸君を驚倒させるものがあるただけ言って置く」などと思わせぶりな予言をする。この大仏は、ルイ・ゴンスが1883年に公刊し、1925年に至るまで版を重ねて（少なくとも仏語圏では）絶大な影響力を持った『日本美術』なる大著では、奈良の大仏を彷彿とさせ、鎌倉の大仏に匹敵する名品として、特筆大書される。だが、いったい何人の読者がこの仏様の流出の顛末を耳にしたことがあるだろうか。

日本美術史の専門的研究者からは、この大仏の流出は、それとして注目するにも値しない無意味な出来事として、ほぼ完全に無視されてきた。その背景には、1897年に施行された古社寺保存法で、指定対象が開闢以来四百年を経過した社寺に限定された、という事情もあろうか。かくして江戸の鑄造仏は、「古美術」として評価される可能性から、行政的に排除されてしまった。

こうして、忘却の淵に沈んでいった歴史の実相を見直すこと。それは逆に常識として通用している歴史像が、いかなる力関係の網の目に支えられて成長したかを吟味する好機でもあるだろう。

パリ市立チェルヌスキ [=セルヌーシ] 美術館開館百周年記念シンポジウム「H. チェルヌスキ (1821-1896) その政治・経済活動と東洋美術蒐集」。1998年6月20日、東京日仏会館にて。